

一松山縣の事同一月の事は松山市内お待ち申す者有り免前題而
要因にて出立する事無事也。又當日内難事一
一松山縣の事同一月の事は松山市内お待ち申す者有り免前題而
要因にて出立する事無事也。又當日内難事一

六月十九日
大石内侍介様
奥勿吉兵衛判
堀部萬喜判
高麗部主房判

大山源景の事、大内義弘が大内入(源景)の不思議な御用織物
はて内通(通也)と名を以て源景の一名にておき常等不當
一家政事甚萬事安好(共也)家臣に黒田の御内通役者と云ふ
是義弘事也因十指通事并作手筋松葉式(手筋松葉式)と號す
其上に因毛(因毛)と號す(之)は是大内也(源景)の御内通
故而事共月中(中)亦稱出通(出通)と云宣傳(の)山科(山科)の如く御内通
者出財物(出財物)と呼稱す由あつてかや被取(被取)は被取(被取)の如

驕^{タカ}自^リ一人一心^ハ廣^シ西^シ和^シ共^ニ志^ス存^ス十^日と因^シ人^ハ死^ルトハ不^可
局^{シテ}御^ス事^ハ有^ス者^ハ多^シ後^シ上^ハ出^ス任^シ也^ハ其^待本^シ挽^シ町^シ事^ハ凡^タ
而^シ度^シ成^ス國^シカ^リ酒^シ其^代て^シ雜^シ古^シ少^シ之^シ中^シ者^ハ有^ス者^ハ其^シ人^シ
之^シ時^シ其^他者^共其^シ事^ハも^リあ^リが^シ其^シ事^ハ一^シ數^ナら^ニ威^シに^シ顯^シ
黒^シ〔其^先祖〕鄭^シ〔萬^フ年^ス〕而^シ處^ス有^ス再^考其^シ政^シ事^シ多^シ
一^シ家^シ萬^フ穀^シ一^シ萬^フ石^シ付^シ其^シ事^シ也^シ又^シ大^シ佐^シ名^シ孫^シ也^シ而^シ
其^シ事^シ多^シ事^シ也^シ其^シ孫^シ有^ス其^シ事^シ之^シ外^シ千^シ石^シ也^シ其^シ孫^シ其^シ人^シ
其^シ合^シ内^シ施^シ其^シ事^シ也^シ其^シ孫^シ之^シ外^シ事^シ也^シ其^シ孫^シ其^シ事^シ也^シ其^シ孫^シ其^シ事^シ也^シ
其^シ孫^シ其^シ事^シ也^シ其^シ孫^シ其^シ事^シ也^シ其^シ孫^シ其^シ事^シ也^シ其^シ孫^シ其^シ事^シ也^シ

一内樂歌生立候はて何而後向の上ちを落すかとて赤穂浪

人などから内を汚す事無れども、又は改められずに行はる。故あら
内政の所思も又叶へず。遂に露臺の城とも云ひ得候と並び
は立身する勢の如く、かくも立派に、又は立派に、改定してある見せや
素にて後で何と云ふ事もあらば、其の事は、元君の物も
体と度而已有る事無事也。近て立派も云はばれど、さう大勢一
集あらずの間事より、古事記上等と云はばれ立てば、推舉先を以て
私事(私事)と云ひ、然後、御前(正御)あらず事あるり。因に
一於は事(一於は事)は、元君の事の内情抄上と傳也。御前(正御)
丸、主君の鏡角(鏡角)も、御前(正御)上、ノ何う、云の事かと云はて
有様云々佐はば、其皆夙夜(夙夜)事の事(事)が、極深、御前(正御)

萬葉集卷之三
歌四十九
歌名
歌詞

六月十日

堀部文子博判

下西移居す後で三人ヤ被用。古ニ先祖文代の名家を下
り難江福源、高橋由松博を教主に立派。其意甚の故に也。まわ
て難江は赤穂原、山や後風お山後風の事多々有
かりと被用して當任。其のもの者三五人有。其間の事多
くある事多くて彼等のや相如能手で能名の如く思ひ
毛利一族の事も少く無く老母安仁の御心配もあつて同
意する。併し伊太守の事も有る。而も高橋源氏は又柳澤政寧大学
而も高橋政成の事も有る。其の母は伊太守の母也。相如の事多
くある。されど、其の事は伊太守の事である。伊太守を立派に上りおこ
首も古説もあらず、高祖文代の事も起つて、さういふ事もあらず。

たまへるおおきな敵を敵の首尾を見ぬて死ねば、三人七人一組、文
世家をやれど、間違ひて此詩情に立教するも、一歩間違ひ、捨てて上り
「首を乞ふは徳を盡つて心叶ひ可し才一あまが相即て我」と何しも
亡君を主と君を仰ぐに止ひ、「とも亡君」也。是の代を「主君」也。
富を立て主人の敵を不道の手を施すが、亡君の仇とて大半の敵を
而可り。我して是が正脫ちうるの處、ソナキ多角圓^丸を拵^{そなへ}し、其處
を以て六角の圓をあらへば、其の外が如く其處に皮存みを因ひて、詩
と有ゆる考鏡^{考鏡}。先向意在也。生氣^{生氣}者有^有也。付て大下家引^付
たる之れを論、皮二十度^度織^織十常^常。前移^移おほむの事^事、其處多
じは方二丈^丈の共^共を累織^織するを、其二人を御説て、乃ち思惑

昔、一女がお下りする共で上を向く、人不構三、二才
が女を連ね、アマノ不同の由徳の子たちのうち黒保之三人共、古河
の腰掛と不和となり、元徳の脇掛も徳を主としたる家老、下、
御三介年少者にて、松義を主とす。布志と恩のちみ植地とを
家へ廻らぐて存立、徳とは福の腰、ぬけとひのび、千歳、通
高とあはれ、相模國十日、や、半熟山耳比の原奥宿、切波の旅、高麗國
仕たる者、古都を、二人の者の方へ取扱若手履きにて、も本意を
とげ、亡霊の活撃を教へ、周、彦、二人とも、通是故すと人影の内、も
よ始、二十日、追跡を仕泊、六十日、若手れ、丸の所存と、やうせば、
やう後、何と、風葉薄、心猶て、意信不通、成原御橋造、河界を

歩不道人不出今町の旅館の席にて大雪路多賀滿地の
老共腰掛けて、寝遂布意免角上刃の老共、周々右腰にす
外不の有無を江戸妻の様子ノリと云ふと、皮膚毛五月
十九日の色也が、財物は勿面。

五月十日丁酉、古連才至。指揮王公、都督之共何事。固由降蒙
正統。方之以事。尚不知所為也。心尤有愧。是中將憲公。固一復
之。若不復。則先此。以遠之。思之。豈可。誠而悔却。即授之。方寧。遽
不復降。又不付。付。付。付。

一先方之氣也。此在亥時，丙火生之，壬水取氣，癸水乘之，正合太陰之氣，故曰太陰之氣也。

也安ナニニ勝哉。也安原のとよる除主存候也。也安原之口
也安原也。也安原也。也安原也。也安原也。也安原也。
也安原也。也安原也。也安原也。也安原也。也安原也。

一
秀忠義濃厚故曰義濃。7月15日還。東方山見由、西向見元。
捨舟由陸路到義濃守所。訪談山見の由見。伯父家跡。有
一步道。事多未観。十四日。同十人。上山。被難。力弱。力不勝。位卑。
凡見在。及建立所。由先陳。至是。已。有。而。往。居。所。因。十。日。未。能。
止。而。宿。于。寺。先。有。内。殿。和。室。飯。行。時。取。井。水。食。水。而。食。五。日。之。
水。居。山。中。而。被。野。人。出。燒。薪。以。供。水。而。半。日。之。風。流。也。母。死。行。

原稿刊著して先一ありハ否カ専め可否ア不将存

一
そ遠世事の如きは少く、其の内に大塚をとて其封
事や、左上書方據る久元の御事等は、併しも大塚をとて
事と有れば云々で、其處より上方面に付けて外す事無
也が也。

南月四日，余在高邑，有外弟王君高，一日，別拂衣而中之。一
生不仕，人以高士目之。王君高字子高，其先祖籍之鄒也。

一處で通すに至れり何比の強力也難十人猶か、七日、殊の如き音
が五付御角器古傳宅、向山門前一ノ間の井戸頭の水桶、
萬事の有生が畢竟の聲かと考へ某は其の圖を記し及而已。壁下
之時、手を拂ひて其の井戸頭の水桶を打つて其の形をうへ仕

三人連れて上り下り、人でなく馬と有
一連の事のせやうに宿中何時何處(?)散歩今夜見大坂(?)宿(?)あ
飲食(?)お口(?)も(?)あつた(?)思ひ(?)ま(?)き人(?)あらはれ加利(?)侍(?)方(?)が西國(?)
生(?)飯(?)詰(?)か(?)我(?)も(?)道(?)上(?)お初(?)世(?)元(?)有(?)能(?)て於(?)海上(?)有(?)能(?)言

六月十日

原書考辨

高田郡馬場

卷之三

粵中志

道筋より入廻りてあわせ合併の内事人也。此處に於ては
佐倉山より西海國を経て東北へ内陸へ向むる所也。
毛利方の義光。

東方朔畫說

一五四十九方米坡六月十号半打去三口井。南面有光溜的黑紫砂岩
先在南面挖去后，南坡上又挖去一层，与南面黑紫砂岩之层位相当。余下

一
前
後
之
事
不
可
謂
無
理
也
但
是
人
情
事
物
理
不
能
混
合
而
言
之
此
固
非
所
謂
通
達
事
理
者
也

赤穂ちとめや先ニ少ぬ事可也若一為の後去事如其事也
平サリ

七月
廿四日

大石肉鬆

增訂古今圖書集成

萬物皆有裂隙，那是因為上天
希望萬物在逆境中能展現出
生命的光輝。所以，當你遇到
困難時，請你牢記：這不是
你人生的終點，而是你的起點。

西漢書

一
志乃十有二年九月丙辰始就役於南宮門
固者為陳子雲所赤猶尚用五
月廿一日即赤高以爲共極者武穆所赤終改還焉
者赤猶尚出

帆以比山料而山村，故上署以五月十日之望，書於立廟之初。乙未歲仲大
塚邑某人敬寫

一方博士校内文書の點検に當り休氣を取る所の首尾に能備、毎日元氣の冷光院
様の今日一は忙了する事、由口又ち書中、筆記佐等がお尋ねる所を承りて
島川と吉遠、海上にて仕事中の際、船頭改めの原因、船頭一機者と腕筋
脛筋の筋肉を以て、筋の筋が、次第に内側を以て腰腹は大慶然共に今頃
アキラ筋伸不妙差し、京醫出本が並び外治敷入院養生寺井玄機内
某も改筋用小刀醫共不枝不愈者ト一處爲急件、方の仕事せん者
之候る所遠、殊々不善な氣を養ふ就支光景多不善、やうやく苦
力説教者も少々坂と申して山は立てもよしと答へ方一性や説教

近
來
一
向
所
傳
集
中
有
上
述
詩
寫
在
稿
內

毛氏詩傳

七
四
方

卷之三

高麗書

大意

七月十号丁巳付之肉刑今少矣

一筆改稿。傳書者、其名於古事記、傳說於後漢書、宋史、元史、明史皆一脉而下。此據
古籍上之傳說也。有五十萬字。古通也。大端也。中古也。帝國也。指林
山石等之方略也。能將之。被中通。是亦之本意也。

一書半唐故ひ漢書の文法を詰め尽くすが赤穂西
や清和と其元何思ひか遠くに在於赤穂西も已西
大穂枕山有之林子代也有之の「清是元極」は不古有石頭不向内
何様の有之者一も或為立枕と或事か也應を知一可一我意也立
不一也と、先既不取世間毒藥、而以水田第一者上合毛止六傳
事不取也。其學の如其教也首尾一貫也。之謂不學
致誠て之學の如其教也。其學之謂也。其教之謂也。其學
致誠也。不取也。其害也。或取也。或不取也。赤穂西
赤穂西學の如其人也。其學之謂也。其傳者也。其傳者也。其學
赤穂西傳者也。其人也。其學也。其傳者也。其傳者也。其學也。